

## 生涯最良の日

明治四年（一八七一年）十二月なかばすぎ、どん底生活の柴家に喜びの声があがりました。旧斗南藩士族の子弟の中から、優秀な少年二人をえらんで、青森県庁が給仕に採用することになり、それに五郎が入ったのでした。もう一人は、田名部の日新館の秀才で五郎より一級先輩の森寅之助でした。日頃無口の佐多蔵も、顔をほころばして喜びました。

五郎が県庁につとめたときの青森県大参事が、熊本出身の野田豁通でした。大参事とは知事につぐ職でこの人との出会いが、五郎の将来に大きな影響を与えることとなります。